

脱植民地化過程のメコンデルタにおける クメール人の言語・仏教・帰属

下 條 尚 志 *

Language, Buddhism, and Belonging during Decolonization: The Khmers of the Mekong Delta

SHIMOJO Hisashi*

When French colonial rule came to an end in the middle of the 20th Century, the Khmers of the Mekong Delta had no choice but to negotiate relations with two different states, South Vietnam and Cambodia. In the period of French colonial rule, during which the two regions were integrated as a super-national colonial space, the Khmers lived in a social environment connected by the Khmer language and Theravāda Buddhism, which was formed over a wide area extending from the Mekong Delta to Cambodia. However, this social environment was gradually forced to change under the Ngô Đình Diệm government of South Vietnam, which gained control of the Mekong Delta as the French withdrew. The Diệm regime carried out nationality change, abolished Khmer language education at public schools, restructured existing Khmer and Buddhist organizations, and sought to sever ties between the Khmers of the Mekong Delta and Cambodian society through the national border. Discontent with the Diệm regime grew among local people and in the Theravāda Buddhist community, which regarded the existing relationship with Cambodian society as valuable and meaningful, and before long, some people began participating in anti-government movements. This article focuses on the problems of language, Buddhism, and belonging in a community in the Mekong Delta province of Sóc Trăng and examines the friction that arose between local people and the emerging South Vietnamese state in the process of creating a new nation-state.

1. は じ め に

本論は、フランスによる植民地統治が終焉した20世紀半ば、ベトナム領となったメコンデルタにおいて生じたクメール人の言語・仏教・帰属の問題について考察する。具体的には、①

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2015年9月14日受付, 2015年10月23日受理

仏領期の末期から終焉直後にかけ、メコンデルタ沿岸部ソクチャン省の一地域社会が、クメール語や上座仏教を通じてカンボジアといかに関わってきたのか、②新たに成立した南ベトナム（ベトナム国、ベトナム共和国）¹⁾のゴー・ディン・ジエム政権（1954～1963年）が、国内において曖昧な状態にあったクメール人の帰属にどう対処し、かれらとカンボジアの関係をどのように変えようとしたのか、③その結果、地域社会からいかなる反応が生じたのかを分析する。

メコン河下流域のベトナム南部（図1）は、民族的、宗教的に多様な背景をもった人々が、開拓や商業を目的に行き交ってきた地域である。特に古くから居住していたとされるのは、隣国カンボジアでは多数派であり、上座仏教を信仰するクメール人である。2010年の統計によると、現ベトナム南部にクメール人は約125万6,000人いる。なかでも南部メコンデルタ沿岸部に面し、メコン河の支流バサック河流域に位置するソクチャン省とチャヴィン省には、それぞれ約39万7,000人、約31万7,000人いる [BCĐTĐT 2010: 144-148, 216-223]。

メコンデルタは18世紀まで国家のフロンティアであり、ベトナム、カンボジア、タイ諸王権の抗争地であった。19世紀初頭に正式にベトナム・グエン朝の統治下に入ったが、中央集権化への叛乱が勃発し、収束がつかぬまま19世紀半ばにフランスの植民地となった [Cooke 2004; Li 2004]。植民地支配が終焉した20世紀半ばにメコンデルタが国民国家ベトナムの領域になって以降、そこに住むクメール人やその居住地の帰属問題が噴出してきた。カンボジアにおいてメコンデルタは「カンプチア・クラオム（低地カンボジア）」と呼ばれ、1970年代後半には同地の奪還を名目に、ポル・ポト政権がベトナム側国境地域に侵攻している [Chanda 1986: 96-98]。

こうした歴史的背景を踏まえ、本論では、メコンデルタにおいてクメール人が多く暮らす地域社会が、ベトナムやカンボジアという国家といかに関わってきたのかを問いたい。この問題について、ショーン・マクハイルは、クメール人とベトナムの多数派ベト人の敵対的な民族間関係に着目して考察している。彼によれば、この敵対関係は、ナショナルな言説で指摘されてきた植民地化以前の王朝間の抗争によるものではなく、両王朝を超域的に統合した仏領インドシナの崩壊によって生じた。独立をめぐりベトミン²⁾とフランスが交戦したインドシナ戦争期（1946～1954年）、メコンデルタとカンボジアで生じたクメール人とベト人の暴力的な衝突が、その後の民族間関係を決定付けたという [McHale 2013]。現在の世界各地を俯瞰しても、独

1) 本論では、1949年にフランス連合内での独立が認められたベトナム国と、1955年にゴー・ディン・ジエムがベトナム国元首バオダイを廃して設立したベトナム共和国を、制度的に連続した国家として捉えている。ただし、ジュネーヴ協定が締結された1954年まで、ベトナム国はフランスの圧倒的な影響下にあったため、1954年以前のベトナム国時代を仏領期末期として捉えることにする。

2) ベトミン（ベトナム独立同盟会）とは、1941年にインドシナ共産党のホー・チ・ミンが、植民地主義からの民族解放を掲げ、ベトナムのさまざまな社会層に呼びかけて結成した統一戦線。1946年末から、ベトミンとフランスの間でインドシナ戦争が展開された [白石 1993: 36-40]。

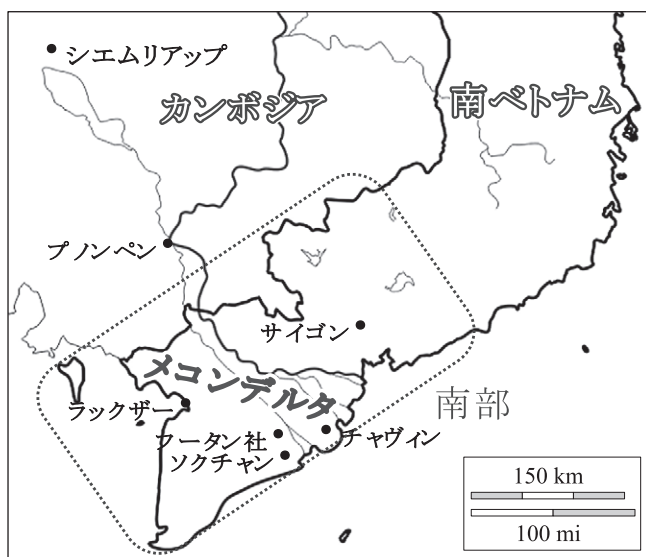


図 1 南ベトナム，カンボジア地図

注) 地図上の「ラックザー (Rach Già)」という地名は、日本で一般的な表記であるが、現地の発音に忠実ではない。標準語とされる北部分言では「ザイクザー」という表記、また南部方言では「ラットヤー」という表記がより適切である。

出所：D-Maps.Com の地図を基に筆者作成。

立をめぐる混乱のなかで帰属が曖昧であった領域で生じた民族間衝突が、後の国家間関係にまで影響を及ぼしてきたことは明らかである。しかしながら、民族間の対立関係を過度に強調することによって、当時のメコンデルタ住民のなかに存在した多様な考えや行動が、看過されてしまうことに懸念を覚える。フィリップ・テイラーは、現実社会の多様性にも目を配り、インドシナ戦争中、クメール人の多くが、平穏な生活を求めて紛争を避け、安全な場所に避難していたことを指摘している。テイラーは、河川流域で展開されたクメール人の生活・宗教史、対立のみでは説明できない複雑な民族間関係を解明し、ローカルな観点から 20 世紀メコンデルタのクメール人の歴史を描いている [Taylor 2013, 2014: 102-127]。テイラーの研究は、地域社会の視点を重視する本論の関心と重なる部分が多い。しかし、メコンデルタ各地のクメール人コミュニティ全体の網羅的な研究であるゆえ、かれらが歴史的にカンボジア、ベトナムという国家とどのように関わってきたのかについては断片的な記述に留まっている。

これら先行研究の問題点を克服するため、本論では、脱植民地化過程にあった仏領期末期からジエム政権期までの時期におけるメコンデルタ沿岸部ソクチャン省の一地域社会に焦点を当てる。そして、ジエム政権が、同政権成立以前にメコンデルタからカンボジアにかけて生成されていたクメール語や上座仏教に基づく人々の空間認識や移動の流れを国境線で断絶し、ク

メール人の曖昧な帰属を明確化させようとしたことに注目する。

ジエム政権下のメコンデルタには、多数派ベト人のみならず、上座仏教を信仰するクメール人や南部経済を握る華僑・華人³⁾など、帰属の曖昧な住民が多数いた。こうした住民たちは、南ベトナム国家への忠誠が不確かにみえ、労働党（現共産党）統治下の北ベトナムに対抗する強力な国家の確立を目指していたジエム政権にとって、国民統合を阻害する存在であった。

では、ジエム政権は南ベトナムにおいて、いかなる統治を構想していたのか。ベトナム戦争以降、ジエムは、カトリシズムや儒教主義的な考え方に囚われ、現実の政治・社会を直視せず、冷酷かつ専制的な統治を行なったと考えられてきた [Fall 1964: 236; 松岡 2001: 158-176 など]。そして彼の民族政策は、極端なベトナム優越主義に基づいており、ベトナム文化への少数民族の同化を目指すものであったことが指摘されてきた [Hickey 1982: 1-7; Phan Thị Yến Tuyết 1991: 256-262 など]。

戦争以降に定着したこのようなジエムの人物像について、近年、エドワード・ミラーは再考を促し、その統治と当時の南ベトナム社会の複雑さに着目する。ミラーによれば、ジエムは、近代的な民主主義理念やコミュニティ論と、カトリック、儒教、ベトナムのナショナル・アイデンティティの統合を試み、民衆の支持を得ようとしていた。ミラーは、ベトナム戦争拡大の背景を、冷戦的戦略というアメリカ中心主義的な視点⁴⁾ではなく、ジエムとアメリカの近代国家建設に関する見解の不一致、および南ベトナム内の多様なナショナリズムの利害調整の失敗という観点から論じている [Miller 2013]。

一方、デーヴィッド・ビッグスは、メコンデルタの浸水しやすい自然環境の制御・開発を目的としたジエム政権の政策が、国家建設の失敗と戦争拡大を招いていた点を指摘する。ジエム政権の政策理念は、近世ベトナム国家による南方への屯田開拓政策、さらに水害対策に優れた北部農村住民のメコンデルタへの入植を構想したフランス植民地官僚の計画にもルーツがあった。ビッグスは、社会を理想的に設計しようとする国家へのメコンデルタ住民の反発が、やがて解放戦線による闘争という形に集約されていったとする [Biggs 2010]。

このように近年の研究は、戦時中に一面的に捉えられてきたジエム政権の統治とその失敗について、南ベトナム国内の多様かつ複雑な社会・政治状況を考慮して、理解し直そうとする傾向がある。しかし一方で、ジエム政権が、メコンデルタに代表されるベトナム南部社会の地域的、文化的特質をどのように変えようとしたのか、個々の地域社会の文脈に即して検討しているとはいいがたい。国家政策に対する社会の反発を示すアクターとして、政治的主張が明確な

3) 一般的に「華僑」は海外に居住しながら中国籍を有する者、「華人」は移住先の国籍を有する中国系住民を指すが、調査地域の住民たちは「華僑」と「華人」を区別せず、双方を一括りに「華人」と呼称していた。そのため本論では、地域住民の証言のなかで言及されている中国系住民はすべて「華人」と表記している。ジエム政権期に顕在化した華僑・華人の国籍問題については、本論「4.1 帰属の明確化」において言及する。

4) 冷戦的戦略という視点の研究として、ミラーは [Herring 2002] を挙げている。

政治組織を主な分析対象としているが、一方で組織化されない個々の住民たちが政策にいかなる影響を受け、どのような住民がどういった経緯で政治組織に参加するようになっていったのかについては、十分に検討していない。文献史料に現れにくく、従来の研究で重視されてこなかった個々の住民たちの考えや行動、経験を検討していくことで、社会のあり方をめぐる住民たちと国家権力の間で生じていた見解の齟齬が明らかになる。

そこで本論では、筆者が現地調査を行なったメコンデルタ沿岸部ソクチャン省の一地域社会を中心に据え、統治による社会の変化と、変化に対する住民たちの反応を考察する。まず、仏領期末期からジエム政権期成立直後まで、クメール語や上座仏教を介してメコンデルタの地域社会がカンボジアといかに関わってきたのかを検討する。次に、ジエム政権がその関係をいかに再編しようとしたのかを考察する。そして最後に、再編への住民たちの反応がどのような形態で現れ、ベトナム戦争拡大の背景となった反政府運動とどう結びついていったのかを論じる。

分析するのは、口述史と文献である。口述史は、筆者が 2010 年 12 月～2012 年 3 月まで調査を実施したソクチャン省フータン社⁵⁾の住民たちの証言である。⁶⁾ 筆者は、フータン社 Q 村の一画「ソムロン区」⁷⁾を主な調査範囲として設定し、住民たちの個人史や地域史についてインタビュー⁸⁾を行なった。文献は、主に仏領期、南ベトナム政府期、現共産党政府期に書かれた地誌、新聞、統計、政策資料、公文書などである。これらの史料は、ジエム政権の政策を明らかにし、またフータン社で収集した口述史を補完するために利用した。⁹⁾

2. 仏領期末期のメコンデルタとカンボジアの関係

2.1 仏領期の上座仏教・クメール語教育

仏領期コーチシナ（現ベトナム南部に相当）のソクチャン省では植民地政府によって運河網が整備され、人の移動が活発化していた。1922 年には、省都ソクチャン市から仏領カンボジアの首都プノンペンまで、1 隻の小汽艇がバサック河経由で週 2 便、プノンペン在住のカン

5) 社は行政村に相当する。ベトナム南部における地方の行政単位は、規模の大きい順から、省 (*tỉnh*, province)、県 (*huyện*, district)、社 (*xã*, village)、村 (*ấp*, hamlet) となっている。

6) フータン社の人民委員会（役所に相当）によれば、2011 年の同社人口は 14,649 人、うちクメール人が 79%、ベト人が 19%、華人が 2%であった（筆者フィールドノート、2011/11/4）。

7) 「ソムロン区」は、筆者が命名した地区名称である。同区は、Q 村内に形式的に存在している行政区画 1～3 区 (*khu*, ward) のうち、2 区の大半、3 区の一部に相当し、計 663 人、159 世帯（2011 年 12 月～2012 年 1 月時点）が居住している。2 区内のある民家に筆者は滞在していたが、その民家周辺の地域は、「ソムロンの木々の外れにあるプノー (*phno*, 微高地)」と呼ばれていた。そこから取って、この区域を「ソムロン区」と呼ぶことにする。

8) インタビューは、単独の人物の場合は、名前や出生年（既に亡くなった人については逝去年）、性別、職業、聞き取り年月日を記す。複数の人物の証言は、「フータン社の住民」といったように、証言者たちの居住地域がわかるように情報を掲載する。筆者自身が調査中に経験したり観察した事柄は、「筆者フィールドノート」と記す。

9) クメール語とベトナム語の日本語表記について、ソクチャン省内の地名や人名は調査地の発音に近いものを記す。ソクチャン省外の地名や人名は、日本で一般的な表記方法（ベトナム語は主に北部方言）に基づいて記す。

ボジア人によって運行され、乗客は半年間で約 1,900 人いた。1924 年には、乗客の増加に対応して小汽艇 1 隻が追加され、ソクチャン市からプノンペンへ向かう小汽艇の乗客数は年間 6,500 人に増えた [Nguyễn Phan Quang 2000: 142-148].¹⁰⁾

ソクチャン市－プノンペン間を取り結ぶ運河網の整備が発達していったことにより、人の移動が活発化し、両地域の結びつきは以前にも増して強化されるようになっていった。特に、ソクチャン省のなかでも調査地フータン社のように上座仏教寺院があり、クメール語話者が多かった地域は、1920 年代後半から、僧侶を媒介にしてカンボジアの上座仏教・クメール語教育の動きに強く影響を受けるようになっていった。

1900 年代までのカンボジア仏教はタイ仏教の影響下にあり、僧侶がシャム（現タイ）に留学しパーリ語を学ぶ傾向があった。タイ仏教の影響を断絶し、インドシナ領域内での統治を貫徹するため、フランスは 1907 年に僧籍証を交付して僧侶の移動を制限し、パーリ語学校を 1909 年にアンコール（1911 年に廃校）、1915 年にプノンペンに設立した。さらにクメール語訳を付した三蔵經の編纂・刊行事業を進めるため、1930 年にプノンペンに仏教研究所 (*Institut Bouddhique*) を設立した。この仏教改革の中心的人物は、カンボジアの僧侶チュオン・ナート (1883～1969 年) とフオート・タート (1891～1975 年) であった [笹川 2009: 8-12]。

かれらは、三蔵經に書かれた「律 (*vinei*)」の内容を再検討し、これまで行なわれてきた僧侶の立ち居振る舞いや寺院での仏教儀礼を、「正しい」形に刷新しようとした。特に読經については、従来のように単にパーリ語經を暗誦するのではなく、その經の意味を理解することを重視し、クメール語訳文を同時に唱える必要性を説いた [小林 2011: 283-284]。

チュオン・ナートとフオート・タートの刷新活動は、カンボジアのみならず、コーチシナにまで及んだ。かれらは、1928 年にコーチシナのクメール系上座仏教寺院を視察し、公教育機関として、地域でクメール語を教える寺子屋を改組した寺院学校や、パーリ語学校を設立する要望の有無を調査した。当時のコーチシナの上座仏教寺院では、カンボジアと同様、慣習の尊重、タイ語の学習とシャム留学、プノンペン留学という傾向が鼎立しており、新たな学校の設立を望む意見ばかりではなかったという [笹川 2009: 18]。

その後、この仏教改革の影響を受けたソクチャン省では、教員養成として 9 人の僧侶がプノンペンの寺院学校へ派遣され、1929 年には、カンボジアと同様の初等教育機関として、10 校の「寺院学校 (*Écoles de Pagodes*)」が設置された。1929 年から 1942 年までに、寺院学校は 10 校から 39 校に増え、そこに通う生徒は、110 人から 1,064 人に増加した。生徒のうち、推薦を受けて試験を通過した者は、ソクチャン市のフランコ・クメール (*Franc-Khmère*) 学

10) 引用しているグエン・ファン・クアン [Nguyễn Phan Quang 2000: 142-148] 『近代ベトナム－新史料 (3 卷) ソクチャン (1867-1945)』は、仏領期のソクチャン省行政文書 (フランス語) の一部を抜粋し、ベトナム語に翻訳したものである。

からカンボジアに留学する僧も増加する [笹川 2009: 19]。1943 年にはプノンペンに本部がある仏教研究所の支部がソクチャン市に設置され、同省の上座仏教関係者はカンボジアのサンガ¹²⁾ 長の影響下に置かれるようになった [VNCH, Hội Đồng Dân Quân 1967 (May 15): 7]。

2.2 カンボジアへ渡った僧侶たち

調査地であるソクチャン省・フータン社においても、仏領期末期の 1940 年代後半から 1950 年代前半にかけ上座仏教やクメール語の教育課程を利用し、カンボジアへ渡った者がいた。しかもそのなかには、周囲から「華人」と呼ばれていた住民も含まれていた。たとえば、フータン社・パー寺の副住職であったチュー（故人、1922～2002 年）の経歴は、彼の弟子であったパー寺の副住職たちの証言、およびチューの葬式本の記述をまとめると、次のとおりである。

フータン社 A 村出身のチューは、畑作農民の両親をもち、両親ともに中国大陸出身者（別の説では母方祖母がクメール人）であった。8 歳の頃から 5 年間、パー寺でクメール語、ベトナム語を学び、1951 年（29 歳）にパー寺で出家、同寺でパーリ語や律を学んだ後、ソクチャン省の協会¹³⁾ の開くパーリ語教室で 2 年間学んだ。1952 年頃、彼はソクチャン省の協会によって派遣され、プノンペンの高等パーリ語学校で 4 年間学んだ。卒業試験合格後、カンボジア・プレイヴェン州において、現地の仏教徒たちに依頼されて 6 年間ほど教育活動に携わっていた。1962 年にパー寺の仏教徒たちに請願されて同寺に戻り、同寺敷地内のパーリ語学校で教鞭を執るようになった。パーリ語に非常に精通した僧として、チューの止住していたパー寺には、メコンデルタ各地の僧侶が学びに集まっていた。チューをはじめ、カンボジアに渡った僧侶は皆、富裕層であった。現在、チューの甥（あるいは姪）は、A 村でガソリンスタンドを経営し、豊かな生活を送っている（パー寺の副住職たち、2011/10/11 他）[Kru Utteisaachar Thach Hanh nung Kru Utteisaachar Trieu Buol 2002: 1-2]。

チューのように華人であっても、クメール語話者で上座仏教徒として育ち、比較的豊かな家庭に育った若者たちは、より高度な仏教教育を受けるためにカンボジアへ渡り、高等パーリ語

11) クメール博物館で働くガイドによると、博物館の施設自体は、1936 年にクメール人僧侶の会合場所として建設された（筆者フィールドノート、2011/1/26）。寄附者リストに記されているシハヌークの称号が「カンボジア国王」となっているため、コーチシナ・カンボジア人協会の本部設立年は、シハヌークが即位した 1941 年以降のことと考えられる。なお、同協会自体は 1938 年にコーチシナ総督の承認を得て結成された [AAMIPCC 1939: 23]。

12) 「サンガ」とは、出家集団のこと。

13) チューの葬式本には、「サマコム (*samakom*, 協会)」とだけ書かれている。フータン社の住民は、ソクチャン市にあったコーチシナ・カンボジア人協会や仏教研究所支部、フランコ・クメール学校をまとめて「サマコム」と呼んでいたため、葬式本に書かれている「サマコム」は、これらいずれかの組織のことを指していると考えられる。

学校で学んだ。そして帰郷した人々は、かれらが学んだ、カンボジア仏教改革の流れを汲んだ「正しき」仏教実践を、出生地に広めていった。

とはいえ、カンボジアへ渡った僧侶は、誰もがチューのように、カンボジアの仏教改革を契機に整備された教育課程を目的に移動していたわけではなかった。カンボジアへの移動は、仏教改革の流れのみに回収されない多元的な動機があったことに注意を払う必要がある。たとえば、現在フータン社・ブオン寺の寺管理委員会メンバーであるコーは、本人の証言をまとめると、次のような経緯でカンボジアへ向かった。

コーは、フータン社に隣接するアンヒエップ社出身であった。本人曰く父方、母方ともに「純粋なクメール」であり、ベトナム南北統一以前は 30 コン¹⁴⁾ (約 4 ha) の農地を所有する農民であった。ブオン寺とソクチャン市のフランコ・クメール学校でクメール語、ベトナム語、フランス語を学んだ。昔は寺院内に学校があり、そこに有給で教員がクメール語、ベトナム語、フランス語を教えに来ていた。1949 年 (19 歳頃) にブオン寺において出家し、資金が不足していたものの、1952 年頃、アンコールワットのあるシエムリアップ州へ移動した。カンボジアへ移動する前にソクチャン市において渡航のための書類を揃えた。当時は書類がなければ、カンボジアに行けなかった。シエムリアップ州に向かう途中、プノンペンに立ち寄り、サラウォアン寺 (*voat saravoan*) で瞑想修行の許可手続きをした。許可を得るために、カンボジア仏教のサンガ長であったチュオン・ナートにも面会した。コーはシエムリアップ州において、虎も出現するような森のなかにあった一寺院に 3 年間止住し、瞑想 (*samnak thoa*)¹⁵⁾ や律の習得に励んだ。シエムリアップ州はタイ国境付近にあるため、タイ語も少し覚えた。その後、1955 年頃に帰郷、1957 年に還俗した (コー、1930～、男性、ブオン寺管理委員会メンバー、2011/6/4 他)。

コーは、チューのように特別に富裕な家庭に育ったわけではなく、仏教改革の流れを汲んだ教育課程を通じてカンボジアへ移動したわけでもなかった。パーリ語経の内容を理解するための学習ではなく、精神的な修行である瞑想に励み、さらにタイ語も学ぶなど、彼が学んだのは、改革派の流れを汲んだものではなかった。¹⁶⁾

ただし、コーのカンボジアへの移動は、1920 年代末以降に整備され始めた上座仏教・クメール語教育課程やそれを推進する組織と無関係ではなかった。彼が学んだソクチャン市のフランコ・クメール学校は、前述のコーチシナ・カンボジア人協会によって管轄されていた。聞き取

14) コン (*công*) は、ベトナム南部で使われている農地面積の単位。1 コン＝約 0.13 ha。

15) クメール語で “*samnak*” は「休息する」ないしは「休息所」を意味し、“*thoa*” は「仏法」または「経」を意味する。コーは “*samnak thoa*” をベトナム語で “*ngồi thiền* (瞑想)” と訳していた。

りによると、同協会は、仏領インドシナから新たな南ベトナム国家への移行過程にあったバオダイ政権下（1949～1954年）、中等教育前期課程（日本の小学校6学年と中学校3学年に相当）を開校し、またカンボジアへの住民の移動を許可する権限を与えられていた（ケーン、1949～、男性、パー寺管理委員会メンバー、2012/3/9）。コーは、コーチシナ・カンボジア人協会を通じたカンボジアへの移動手続き、プノンペン寺院において瞑想修行の許可手続きを行っていた。これらの点から、当時は移動する僧侶たちの管理が政治組織、仏教組織によって行なわれていたことがわかる。

このように、仏領期末期のソクチャン省では、1920年代以降に広まっていった上座仏教・クメール語教育課程を通じて、あるいはその課程を直接的には利用せずにカンボジアへ渡り、影響を受けて帰郷する僧侶がいた。これらの僧侶たちがカンボジアへと向っていったのは、かれらが民族的にクメール人であったためというよりむしろ、チューのように華人とみなされていた人物であれ、クメール語の読み書きができ、経済力や向学心、また上座仏教への信仰心をもっていたためであった。

3. ゴー・ディン・ジエム政権期初期のメコンデルタとカンボジアの関係

3.1 カンボジアへの巡礼者

1954年にジュネーヴ協定が成立してフランスの植民地支配が終焉し、新たにメコンデルタを統治することになったのは、南ベトナムのジエム政権であった。同政権が成立してまもない1950年代後半、メコンデルターカンボジア間を行き交う人々の流れは、誕生したばかりの国民国家の影響をまだ直接受けていなかった。両地域の間では人や情報が依然として行き交い、カンボジアに巡礼の旅へと出かける者もいた。

たとえば、当時のソクチャン省・フータン社において200～300ha規模の大土地所有者であったリエム（故人、1917～2005年、男性、農民）は、1955年にフータン社の住民を引き連れアンコールワット参詣へ出かけている（フン（リエムの長男）、1936～、男性、農民、2012/2/24他）。フータン社住民たちの証言をまとめると、旅の経緯は次のとおりであった。

1955年、フータン社のパー寺近くに、自動車を2台もっているアエムという者がいた。シハヌーク治世下カンボジアで博覧会¹⁷⁾が行なわれていたこともあり、アエムの自動車に乗っ

16) 現フータン社において、コーの出家したブオン寺は、地域の慣習的な「古い実践（*boran*）」を行なう寺とされている。たとえば、儀礼においてパーリ語経が唱えられる際、在家信者に経の意味が理解できるようにクメール語訳文が唱えられることはない。一方、チューの止住したパー寺は、仏領期におけるカンボジアの仏教改革の流れを汲んだ「新しい実践（*samai*）」を行なう寺といわれる。儀礼ではパーリ語経のクメール語訳文が唱えられ、また公式の教科書に基づくパーリ語教育が実施されている。パー寺での出家経験者のなかには、露骨にブオン寺の仏教実践を「誤った」ものとみなす者が少なくなかった（筆者フィールドノート 2011/10/8他）。



写真2 アンコールワットを参詣した旧地主リエムと彼の妻（1955 年頃撮影）
出所：プオン寺講堂にて掲示されている写真を，筆者撮影（2011/1/15）。

て，40～50 人程度の団体でカンボジアへ旅行に行った。全部で 1 週間ほどであった。リエムの長男フン（1936～，男性，農民）によると，¹⁷⁾ 当時，サイゴンまで行ってパスポートの申請をしなければならなかった。一方，夫，両親とともにこの旅に参加したユイン（1927～，女性，農民）は，当時パスポートを所持していたかどうかについて記憶していなかった。一行はプノンペンのワット・プノム（*voat phnom*）¹⁹⁾ に宿泊し，その後アンコールワット（写真 2）へ向かった。旅行参加者には，リエム夫妻や彼の妻方親族，またリエムの農地で働く小作農がいた。ユインによると，旅の目的は，積徳行と観光であり，旅行中は菜食で肉を食べなかった。一方，この旅行に同行していなかったフンによると，参加者たちには，クメール人としての自分の故郷（*srok kamnaat*）を知るという目的もあった。彼の父リエムは華人であったが，近隣に多数のクメール人が暮らしていたため，自身をクメール人のように思っていた（フータン社住民，2012/2/24 他）。

以上の証言より，この時のカンボジア旅行はあくまで観光ではあったが，一種の巡礼の性格

17) プノンペン・ポストの記事によれば，1955 年にプノンペンでは，国際博覧会が開催され，ワット・プノム周辺では複数の展示用の大型テントが点在していた [The Phnom Penh Post 1998 (June 5)]。

18) フン自身は旅に同行していなかった。

19) プノンペンの代表的な観光地のひとつ。プノンペンという名称は，昔ペンという名の女性が，現在のワット・プノムの位置する丘（プノム）に仏像を祀ったことに由来する。

を帯びていたと考えられる。参加者が積徳行²⁰⁾を目的としていたと証言しているように、仏教徒としての価値規範が反映された旅でもあった。

大乘仏教徒が行なう菜食を実践していたという証言があるように、リエムのような華人や「混血」住民もカンボジアへの巡礼の旅に参加していた。聞き取りによると、リエムの父は、1890年代頃に中国広東省からフータン社周辺地域へ移住してきた者であり、母もフータン社出身の華人であった（フン、1936～、男性、農民、2012/2/24 他）。また参加者のひとりであったユインは「華人と混血のクメール人」であり、彼女の父方祖父、母方祖父が華人であった（ユイン、1927～、女性、農民、2011/6/8）。

さらに、この団体旅行は単に富裕な地主たちの寄り集まりではなく、貧しい農民たちにも開かれていた。参加者のユインとその両親は、1954年頃にインドシナ戦争の激戦地メコンデルタのラックザーからフータン社に移住し、リエムから10コン（約1.3ha）の農地を借り受けた零細な小作農であった（ユイン、1927～、女性、農民、2012/2/23 他）。

こうした団体旅行の内実から、参加者の宗教的、民族的な多様性や経済的な格差が垣間みえる一方、この旅行の目的のひとつにカンボジアという「故郷」を知ることが含まれていたことは興味深い。当時の参加者たちは、カンボジアを、かれらのルーツがある土地として認識していた。仏領インドシナが崩壊した直後の1955年時点では、フータン社の住民たちのなかには、カンボジアを、パスポートを携行しなければならない外国として認識していない者もいた。

3.2 上座仏教・クメール語教育の存続

ジエム政権期初期において、メコンデルタとカンボジアを結んでいたのは、住民たちの巡礼旅行だけではなく、1950年代後半のソクチャン省には、仏領期に各地の寺院などにおいて行なわれていた上座仏教・クメール語教育課程が、成立まもない南ベトナム国家に認可されて存続していた。

現在フータン社在住で、ブオン寺管理委員会のメンバーのひとりであるフオンは、1950年代後半に僧侶としてカンボジアへ渡ったと述べる。彼自身の証言をまとめると、その生い立ちは次のとおりである。

フータン社T村出身で、自身も父母も「華人と混血のクメール人」である。父方祖父は中国広東出身者、母方祖父は潮州出身者であった。実家は程々に豊かで、40コン（約5ha）の農地を所有し、ホンダ製のバイクが1台あった。5-6年生までは、フータン社に隣接する

20) 積徳は、現世ないしは来世に幸福をもたらしうる行為結果を蓄積することを意味する。人々は積徳を通じて、たとえば来世において富裕者として生まれ変わることを期待する。寺院のサンガに食事や物品、金銭の寄進を行なったり、寺院の建立・修繕費を工面したり、貧しい人々を助けるなど、多様な行為を通じて徳は累積される。

フータム社にあった学校に通い、7-8 年生からはソクチャン市の学校へ通った。そこでは、クメール語とベトナム語、フランス語を学んだ。昔の教員は現在の教員よりも優秀で、クメール語、ベトナム語、フランス語の授業は、それぞれの言語のみで授業を進めた。彼は学校で成績が一番悪かったが、先生がよく面倒をみてくれた。1955 年の 16 歳の時から、1966 年まで 11 年間ブオン寺で出家していた。その間、1959 年から 1962 年までの 3 年間、カンボジアに渡ってプノンペンのウナロム寺²¹⁾で学んだ。ウナロム寺では、パーリ語に加え、クメール語、タイ語、英語、フランス語を学んだ。教員は、「華人と混血のクメール人」であった。ベトナムでは、12 学年に相当する中等教育課程 (*thnak kandal*) まで学んだ。学業を終えた後、国境の町ポイペトまで行って、よく国境を越えてタイまで遊びに行っていたので、タイ語は今でも少しできる (フォン, 1940~, 男性, ブオン寺管理委員会メンバー, 2011/9/4 他)。

フォンが幼少の頃にソクチャン市で学んでいた学校は、仏領期に設置されたフランコ・クメール学校のことである。同学校卒業後、フォンは出家し、より高等な世俗教育と仏教教育を受けるべく、プノンペンの寺院に設置された学校に進んでいる。フォンがこのような上級の学校で学ぶことができたのは、両親が比較的富裕であったためと考えられる。

当時フォンのように、12 学年、すなわち中等教育後期課程 (日本の高校に相当) の 3 学年目を、プノンペンまで行って学んだ者はごく少数であった。たとえば、筆者が集中的に調査を行なったフータム社ソムロン区では、フランスが撤退した 1954 年以前に学校教育を受けられる年齢に達していた者 (1947 年以前に生まれた者) は計 45 人いたが、うち学校教育を受けた者は 20 人 (うちベトナム語学習者は 19 人、クメール語学習者は 5 人)²²⁾であった。さらに中等教育前期課程に進学した者はわずか 4 名であった。この 4 名のうち、ソクチャン市のフランコ・クメール学校で学んだと証言した者はただ 1 人²³⁾であった。中等教育前期課程まで進学した 4 名のうち、2 名²⁴⁾は南ベトナム政府期ソムロン区において特に富裕な旧地主層出身者であった。

このように、ジエム政権期初期の 1950 年代後半は、フォンのように恵まれた環境にあれば、

21) ウナロム寺は、カンボジアのサンガ長チュオン・ナートが止住していた寺として知られている。

22) クメール語学習者 5 名のうち、ベトナム語を学ばずにクメール語のみを学んだ 1920 年生まれの男性を除き、全員がクメール語、ベトナム語両方を学んでいる。

23) フランコ・クメール学校で学んだと証言した女性 (チュック, 1936~, 農民) は、南ベトナム政府期ソムロン区において 300 コン (39 ha) ほどの農地を所有した旧地主層アム (1932~, 男性, 農民) の妻である。彼女は、「華人と混血のクメール人」であり、彼女の父方祖父は中国出身者であった。彼女は、フランコ・クメール学校において中等教育前期課程 2 学年目 (1949-50 年頃) まで学んでいる。

24) 2 名のうち、ひとりとは南ベトナム政府期においてフータム社最大の地主 (約 200~300 ha) であったリエムの長男フン (1936~, 男性, 農民)。もうひとり (サロン, 1946~, 女性, 主婦) は、南ベトナム政府期に 200 コン (約 26 ha) ほど所有していた世帯の出身者。

プノンペンに留学できる状況が続いていたが、次第にカンボジアへの移動は制限されるようになっていた。フオンと同様にフランコ・クメール学校で学んだ経験をもつプオン寺の経理係セツによれば、ジエム政権成立以降、カンボジア国境を越えるためには、各省の役所で許可を得なければならなくなった（セツ、1936～、男性、プオン寺経理係、2011/9/28 他）。メコンデルターカンボジア間を行き交っていた住民たちの動きが、少しずつ南ベトナムという新たな国家領域の制約を受けるようになっていた。

4. ゴー・ディン・ジエム政権による統治

4.1 帰属の明確化

それでは、ジエム政権は、具体的にいかにメコンデルターカンボジア間を行き交う住民たちの動きを制約し、南ベトナム領域内で住民統治を貫徹させようとしたのか。

ジエム政権の成立当初、南ベトナム国内に在住するクメール人や華僑・華人は、帰属が曖昧であった。ジュネーヴ協定成立年の1954年の統計によれば、ベトナム南部（旧コーチシナに相当）には、南ベトナム政府が把握していた限りで、「クメール（カンボジア）人（*Mièn, Cambodgiens*）」が約23万人、「中国人（*Trung Hoa, Chinois*）」が約54万人いた。²⁵⁾ この人口分布を示す統計のタイトルが、「1954年ベトナム南部の調査人口—性別・国籍別分布」となっているように、国内のクメール人と華僑・華人の人口は、「国籍（*quốc tịch*）」に基づいて集計されたことになっている [VNCH, Bộ Kinh Tế Quốc Gia 1955: 22]。しかし、仏領期に移住してきたカンボジア出身者や中国大陸出身者ならまだしも、仏領期以前に既に定住していたクメール人や華人をルーツにもつ住民が、カンボジア国籍、中国籍を保持していたとは考えにくい。「国籍別」で集計が行なわれた背景には、フランスの統治が終焉した直後の1954年、クメール人と華僑・華人が南ベトナム、あるいはカンボジア・中国いずれに属するのか、まだ政策的に分類されていなかったため、エスニック・グループを国籍と同等のものとしてみなしたことがあったと考えられる。

新たに誕生したジエム政権は、クメール人と華僑・華人のこのように曖昧な国家への帰属を明確化しようとした。1958年の統計では、ベトナム南部におけるカンボジア国籍者²⁶⁾は約12万人、中国籍者も約12万人と [VNCH, Bộ Kinh Tế Quốc Gia 1960: 44]、1954年統計に比べて

25) ベトナム南部（旧コーチシナに相当）における国籍別統計リストは、「ベト」、「欧州」、「クメールとラオス」、「中華」に分類されている。南部に暮らすラオス人はごく少数であったと考えられるため、「クメールとラオス」の人口統計は、ほぼクメール人の人口に相当するものと判断した。統計数字は、インドシナ戦争の混乱によって大規模な人口移動が起こり、かつ独立前後で国籍問題が生じた時期に推計されたものであるため、あくまで目安であることに留意されたい。

26) 1954年統計と同様に、原文の項目は「クメールとラオス」となっているが、南部に暮らすラオス人はごく少数であったといえる。そのため、「クメールとラオス」の人口統計は、ほぼクメール人の人口に相当するものと判断した。

大幅に減少しており、クメール人や華僑・華人に対する南ベトナム国籍の付与が進んでいた。実際、1957 年から 1958 年にかけて、南ベトナム政府の官報には、国内在住の外国籍を有する者に対して次のような公文書が数多く掲載されている。

1957 年 4 月 22 日、97-TP 号法令を引用し、カンボジア国籍のヌオン・サヴァット (*Nuon Savath*) 氏がベトナム国籍を取得し、グエン・ヴァン・ヌオン (*Nguyễn Văn Nuôn*) と名乗ることを許可する [VNCH, Công Báo 1957 (May 4): 1500].

本日、中国籍²⁷⁾で、1939 年 7 月 9 日、カンボジアのクム・チュバー・オムパウ (*Khum-Chbar Ampéou*) 生まれ、チョウ・チャイ (*Chou Chhai*) 氏 (死亡) とネアン・ターイ・スー (*Neang Thai Su*) 夫人 (死亡) の子であるイア・チェン・グオン (*Ia Chheng Nguon*) 氏がベトナム国籍を取得することを許可する。当事者は、ベトナムの姓名ダオ・タイン・グエン (*Đào Thanh Nguyên*) を名乗ることが許可される [VNCH, Công Báo 1958 (September 27): 3694].

この文書からは、当時の南ベトナム国内に、カンボジア出身で南ベトナム在住の者、あるいは南ベトナム出身であるがカンボジア国籍を有する者、さらにはカンボジア出身で中国籍を有する者がいたことが読み取れる。もっとも、仏領インドシナに生まれ、その国家領域内で生きてきた住民たちが、1950 年代後半の時点でどれほどカンボジア国籍、中国籍を有していたかは疑わしい。帰属の曖昧な住民たちにベトナム国籍を取得させ、ベトナム風の姓名を付与することで、国民と外国人の区別を鮮明にし、行政的な管理を強化するという思惑があったと考えられる。

国籍付与を通じたクメール人の管理強化が図られていた理由として、1950 年代後半にジエム政権とカンボジアのシハヌーク政権との間で、国境論争が生じていたことが挙げられる。ジエム政権下南ベトナム政府の機関新聞『タイムズ・オブ・ベトナム』によると、1958 年 6 月、南ベトナム軍の国境侵犯があったとするシハヌーク政権と、それを否定するジエム政権との間で論争が勃発した。国境侵犯を誤りだとする『タイムズ・オブ・ベトナム』によれば、1958 年 5 月にカンボジアの国営ラジオが、ベトナム南部のクメール人に向け、南ベトナム政府が抑圧や差別を行なっていると宣伝し、同政府への叛乱を促していた。²⁸⁾ 同新聞は、この放送を

27) 原文に忠実に訳すと「中華国籍 (*quốc tịch Trung Hoa*)」。この文言は、当時の南ベトナムとの国交の有無を考えると、国交のあった中華民国籍のことを指していたといえよう。ひとつの中国しか認めないという冷戦構造のなかで、実際には中華人民共和国領になっていた中国大陆の出身者も、ジエム政権は中華民国籍とみなしていたと推察される。

28) フーターン社ソムロン区では、南ベトナム政府期にラジオは普及しており、カンボジアからのラジオ放送を聴くことができたという証言が複数あった (ソムロン区の住民, 2012/3/6 他)。

虚構かつ内政干渉とし、同国のクメール人が「古来の伝統に沿ってベトナムの国籍 (citizenship) が付与され、他のベトナム人と同様に法的、政治的な権利を享受している」と主張した [The Times of Viet Nam 1958 (June 28): 2, 8].

このように、ジエム政権は、差別や抑圧を主張するカンボジア政府への対抗上、国内のクメール人へのベトナム国籍付与が、かれらが平等な権利を享受していることの証左であるとアピールしていた。さらには、国籍付与による住民の管理強化を通じて、国内のクメール人と、かれらに遠隔的に影響力を及ぼそうとするカンボジア政府の関わりを断絶しようとする意図もあったといえよう。

帰属の曖昧な住民に対する国籍付与は、クメール人や華僑・華人に対する公的な呼称にも影響を与えた。1955 年刊行の南ベトナム政府統計では、単にクメール人は「ミエン (Miên)」、華僑・華人は「中華 (Trung Hoa)」と呼称されていた [VNCH, Bộ Kinh Tế Quốc Gia 1955: 22]。ところが、1963 年の同政府資料では、「クメール (ミエン) 系ベトナム人 (Việt gốc Miên)」、「華人系ベトナム人 (Việt gốc Hoa)」というように、あくまでベトナム国籍であることを強調した呼称が使用されるようになっていた [VNCH 1963: 599]。「クメール系ベトナム人」という公的な名称は、ジエム政権が、南ベトナムのクメール人代表であったソン・ターイ・グエン (Son Thái Nguyên)²⁹⁾ という人物を大統領官邸に呼び出し、クメール人の少数派としての地位をめぐって激しく論争した末に決定したものであった [Giáo Hội Phật Giáo THERAVADA 1969 (May 28): 3]。

このような呼称の変更は、外国籍をもつクメール (カンボジア) 人・華僑と、南ベトナム国籍をもつクメール人・華人を明確に峻別するための措置であったといえる。ただし、クメール人への国籍付与は、その多くが仏領期に移住し人口の流動が顕著であった華僑・華人ほどには政治問題化しなかったと考えられる。³⁰⁾ なぜなら、クメール人の大多数は、仏領期以前に既に南部メコンデルタに居住していた人々の子孫であり、ジエム政権の発足当初から、既にベトナム国民として、徴兵義務といった国家制度のなかに組み込まれていたからである。

仏領期コーチシナにおいてクメール人は少数派であったが、多数派ベトナム人よりも大柄で丈夫な身体をもっているとされ、兵士として重用されていた。その重要性は、クメール人僧侶の徴兵免除の是非をめぐって、コーチシナ総督が 1928 年に上座仏教国タイのバンコクを視察しに行くほどであった。1930 年以降は、クメール人部隊が編成され、コーチシナの共産主義運動の鎮圧やカンボジア各地への派兵に利用された [Tạ Chí Đại Trường 2011: 261-267]。

29) ソン・ターイ・グエンは、仏領期にソクチャン市に設置されたコーチシナ・カンボジア人協会の事務局長の地位にあった [AAMIPCC 1939: 22]。彼は、メコンデルタ出身でカンボジアの政治指導者として著名なソン・ゴック・タンの実弟であったといわれている (セツト、男性、1936～、ブオン寺経理係、2011/9/26 他)。

30) 華僑・華人に関する概説史やジエム政権期の国籍問題については、[Schrock *et al.* 1966: 931-1018] を参照。

第二次世界大戦後、コーチシナ領を継承したバオダイ政権下の南ベトナム暫定政府は、1949年に国内のクメール人を「南ベトナムのクメール人少数派 (*Minorité Khmère du Sud Vietnam*)」と捉え、「コーチシナに潜在するカンボジア人は、準備途上にあるベトナムの規定にしたがって厳密に管轄される」とした [Gouvernement provisoire du Sud Viêt Nam 1949 (March): 1-3].

このように、クメール人が徴兵や少数民族政策の対象となってきた歴史的経緯を鑑みれば、コーチシナとその後の南ベトナム暫定政府を継承したジエム政権下で、クメール人に対するベトナム国籍付与という政策自体が政治問題化するケースは少なかったといえよう。

4.2 公立学校におけるクメール語教育の廃止と上座仏教組織の再編

もっともジエム政権下、クメール人は多数派ベトナム人と同様に扱われたわけではなく、また従来のように「少数派」として捉えられたわけでもなく、「クメール系ベトナム人」という微妙なカテゴリーに分類された。

このカテゴリーは、国内のクメール人はカンボジア国籍ではなく、あくまでベトナム国籍ではあるが、多数派ベトナム人とは異なる政策が必要な住民というニュアンスが含意されているように思われる。ジエム政権がこのようなカテゴリーを設けた背景には、いかなる意図があったのだろうか。

ジエム政権は、同政権崩壊直前の1963年に、自らの実績に関する報告書を作成した。その報告書には、1962～1963年におけるクメール人政策の実績として、七夕と国慶節の折にクメール人僧侶・名士の使節団を組織し、大統領ジエムと謁見させたこと、バースエン省（現ソクチャン省、バクリエウ省に相当）のラジオ局において、クメール語放送を開始したことが挙げられている [VNCH 1963: 599].

当時の『タイムズ・オブ・ベトナム』の記事によれば、国慶節の時にクメール人僧侶に面会したジエムは「クメール系ベトナム人全員に対し、一所懸命に共産主義の破壊計画に対抗し、敵のプロパガンダに欺かれた人々を正しき道に戻すよう訴えた」 [The Times of Viet Nam Magazine 1962 (October 28): 12]. 一方、現ソクチャン省政府編集の地誌によると、当時のラジオ局で流されていたクメール語放送は、ジエム政権の「政策の主張を宣伝し、クメール人を共産主義の撲滅へと駆り立て、革命を破壊する」ことを目的にしていたという [Ban Tuyên Giáo Tỉnh Ủy Sóc Trăng 2005: 91].

ジエム政権が国内のクメール人に向けて強く反共を訴えていたのは、同政権の諸政策に不満を抱いていたクメール人有力者が、共産主義に傾倒することを警戒していたためであった。ジエム政権は、メコンデルタとカンボジアを結びつけていた上座仏教やクメール語教育の再編を試み、その結果として反発を招いた。

前述したように、ジエム政権が成立してまもない1950年代後半は、まだ上座仏教・クメール

語教育は大きな変化を受けておらず、依然としてメコンデルターカンボジア間で活発な人の行き交いがみられた。南ベトナム政府編纂の地誌によると、1959年のバースエン省には、クメール人を対象にした公立の初等学校がまだ63校もあった [VNCH, Bộ Thông Tin 1959: 16]。

ところがその後、こうした状況は変化し始めていた。南ベトナム政府期にクメール人研究を行っていたレー・フオン³¹⁾によれば、ジエム政権は、国内の文字と言語を統一するため、公立学校のクメール語教育を廃止し、クメール人の子弟にベトナム語の学習を強制するようになったという [Lê Hương 1969: 180]。

上座仏教への管理も強まる。ジエム政権は、南ベトナム国内に複数存在した上座仏教組織を束ね、政府と仏教界を媒介する新しい組織の確立を試み始めた。そのためには、まずカンボジアと結びついていた従来の上座仏教組織を再編する必要があった。

メコンデルタの上座仏教界は、その組織体系に関しては、仏領期末期に急速にカンボジア仏教界の影響を受け始めていた。前述のレー・フオンによると、仏領期コーチシナにおいてクメール人人口が多い省ではそれぞれ、カンボジアのサンガ長への連絡や相互扶助を目的とした「サンガ律会議 (Hội Đồng Kỷ Luật Sư Sãi)」という上座仏教組織が存在し、そのトップに「メー・コーン (*me kon*, 省僧長)」がいた。これらの組織は、とりわけソクチャン省に1938年³²⁾にコーチシナ・カンボジア人協会、1943年に仏教研究所支部が設立されて以来、カンボジア王国から支援を受けるようになっていた [Lê Hương 1969: 166-167]。コーチシナにおいて、カンボジアの影響下にあるメー・コーンの役職が置かれたのは、1944年のことであった [McHale 2013: 372]。³³⁾

こうした上座仏教の状況はジエム政権成立後も存続していたが、内務省は1960年11月、チャヴィン省³⁴⁾において、国内に複数存在していたクメール系上座仏教組織の統一を目標に掲げる「原始仏教会 (Hội Phật Giáo Nguyên Thủy)」³⁵⁾の設立を承認した。同仏教会の目的は、仏教徒間の交流や相互扶助のほか、「政府の教育によって仏教徒が公民としての自覚を学ぶことを補助し、政府とクメール人との間を仲介し、政府の主張と道理を滞りなく広め、クメール人の正当な願望を政府に伝達する」ことであった。原始仏教会は、「宣伝分野において政府を支援することを目的に、パリー語初級学校、中級学校の2校を開校し、弘法 (*hoằng pháp*)

31) レー・フオンは、仏領期にカンボジアに居住していた越僑であり、クメール語に精通した人物であったという (トゥエット, 1952~, 女性, ホーチミン市人文社会科学大学所属の人類学者, 2014/2/15)。彼の研究は、現地調査に基づいたものであるため、ある程度信頼性が置ける史料である。

32) レー・フオンは、コーチシナ・カンボジア人協会の設立を1940年としているが [Lê Hương 1969: 167]、仏領期の資料では、同協会がコーチシナ総督の承認を得たのは1938年となっている [AAMIPCC 1939: 23]。

33) 筆者調査では、「サンガ律会議」に関する証言は得られなかった。しかし、ベトナム戦争が終結した1975年の「解放」前には、「メー・コーン」が、県、省毎に存在していたという証言はあった (トン, 1955~, 男性, フータン社幹部/ブオン寺管理委員会メンバー, 2011/10/7 他)。

34) 当時の省名はヴィンビン省。

35) 「原始仏教」という言葉は、ベトナムでは上座仏教を指して使われる。特に差別的なニュアンスはない。

を行なう幹部の養成課程を設けた」という [Lê Hương 1969: 171-172].

原始仏教会の設立経緯から、同教会の結成承認を通じて、ジエム政権が、カンボジアの仏教界と連絡を取っていた各省のさまざまな上座仏教組織をひとつに統合し、政府直属の大衆動員組織への転換を試みていたことがわかる。こうした意図の下に、仏教教育が行なわれるパーリ語学校を、仏法のみならず国家の世俗法を普及させる機関に変え、そこで学ぶ僧侶らを政府のエージェントに仕立てようとしていた。「弘法」は本来「仏法を広めること」を意味するが、政府による宣伝工作の支援を目的に幹部養成課程が設置されたことを考慮すると、「世俗法を広めること」も含意していたと考えられる。

公立学校におけるクメール語教育の廃止や上座仏教組織の再編に輪をかけて、1960年代になると、南ベトナムとカンボジアの国家間関係がさらに悪化し、上座仏教徒たちが両国間を行き交うことが難しくなっていた。1963年のジエム政権の報告書における以下の記述から明白であるように、同政権はカンボジアの共産主義への対応に苛立っていた。

扇動者、あるいは共産主義者の連中が、ベトナム共和国の領土に侵攻し、国境地域の治安を乱すため、カンボジア領土を利用して基地を建設している。ベトナム共和国政府は連中を阻止するための多数の解決策を、カンボジア政府に対して何度も提議してきた。残念なことに、今日までこの解決策は同意を得られていない [VNCH 1963: 302].

当時のカンボジアのシハヌーク政権は、戦争が自国に及ばぬように中立路線を掲げ、南ベトナムと接する国境地域での北ベトナム軍の活動を黙認していた [Chandler 2008: 244-246]. このため、南ベトナムとカンボジアの関係が悪化し、両国間の僧侶の往来が制限されるようになっていた [Lê Hương 1969: 172].

5. ジエム政権の統治に対する反応

5.1 僧侶の銃殺事件

以上で論じたように、ジエム政権のクメール語、上座仏教政策は、仏領期にカンボジアとの関わりのなかで成立していたメコンデルタのさまざまな組織を、南ベトナムの国家機構に編入することに狙いがあった。さらにいえば、クメール語や上座仏教を基盤に、国境を越えた範囲での住民たちの移動や空間認識を、国家領域内に収斂させようとする意図もあったといえよう。

その一方で、ジエム政権によるクメール語、上座仏教政策は、個々の地域社会におけるローカルな実践にまで深く介入するものではなかったと考えられる。たとえば、公立学校でのクメール語教育の禁止後も、依然として寺院内ではクメール語が教えられていた。フータン社

ソムロン区では、公立学校でのクメール語教育が禁止になった1959年から1963年まで、ブオン寺に「クメーン・ローク (*kmeeng louk*, 寺子)」として住み込み、僧侶の身の周りの世話をしながらクメール語の読み書きを学んでいたと述べる者がいた(デット (故人), 1946～2012, 男性, 農民, 2011/5/28)。僧侶に対するパーリ語教育も地域社会の寺院では行なわれていた。パー寺では1950年にパーリ語学校が設立されていたが、前述したように、1962年には、プノンペン的高等パーリ語学校で学んだ僧侶チューが帰国し、同寺でパーリ語を教え始めていた。1962年当時のパー寺には、およそ70～80人の僧侶が止住していたといわれている(フータン社の住民, 2012/3/9 他)。つまり、各寺院で行なわれていたローカルな諸実践は、ジエム政権期に大きな変化を迫られていたわけではなかった。

とはいえ、当時フータン社の住民たちは、ジエム政権期に生じていた上座仏教・クメール語教育環境の変化に敏感に反応していた。たとえば、フータン社に隣接するフータム社に在住するチエンは、1957～1959年にかけて、ソクチャン市にあった前述のフランコ・クメール学校の中等科に通っていたが、1959年に同学校の中等科が閉鎖されたと証言する。彼女はその経緯を次のように語っている。

地元のプノロカ寺の寺院学校で小学校5年生までベトナム語、クメール語を学んだ後、私は試験を通過して、サマコム(フランコ・クメール学校—引用者注)³⁶⁾に1957年から1959年まで通った。そこでクメール語、フランス語、ベトナム語を学んだ。具体的には、作文や書き取り、カンボジアの歴史を勉強していた。だが、カレアン寺の住職が1959年に撃ち殺されたので、サマコムの中等科は一時期閉鎖されてしまった。誰が撃ったのかはわからない。初等科はそのまま継続していた。中等科は、おそらくその後再開されたと思うが、閉鎖とともに私は退学した(チエン, 1942～, 女性, 農民, 2011/11/17)。

現ソクチャン省政府編纂の地誌³⁷⁾によると、当時、銃殺されたのは、ソクチャン市の中心部にあるカレアン寺に止住していたタイック・ケアン(*Thạch Khean*)住職であった。彼は、当時の労働党(現共産党)幹部であり、「クメール語教育廃止の反対」や、「従来からあるクメール人の伝統的な仏教組織」の存続を訴えていた。こうした行動はソクチャン省の各寺院全体に大きな反響があったため、ジエム政権はタイック・ケアンを暗殺し、「ベトコン(ベトナム共産主義者)が殺した」と宣伝していたという[Ban Tuyên Giáo Tỉnh Ủy Sóc Trăng 2005: 94]。

36) フランコ・クメール学校は、フータン社周辺地域の住民からは通称「サマコム(協会)」と呼ばれている。その理由は、同学校が、仏領期の1938年に組織されたコーチシナ・カンボジア人協会に管轄されていたためである。

37) 同文献の記述は、主に革命に参加した経験をもつクメール人への聞き取り調査に基づいている。

現政府編纂の地誌は、住民たちによる反政府活動への労働党の関与を過度に強調する傾向があるため、タイック・ケアン住職が実際に労働党とどれほど関わっていたのかは検討の余地がある。しかし、1959 年頃からジエム政権と上座仏教徒との間で、対立が先鋭化していたことは明白である。カレアン寺は、現在に至るまでソクチャン省の上座仏教組織の本部が置かれてきた中心的な寺院である。当時、同寺院の周囲には、フランコ・クメール学校を運営していた前述のコーチシナ・カンボジア人協会や、プノンペンに本部を置く仏教研究所の支部があった。カレアン寺のタイック・ケアンは、住職としてこれらの施設の経営に関わっていた可能性が高い。そのため、彼がジエム政権によるクメール語教育の廃止や、プノンペンと連絡を取っていた従来の上座仏教組織の再編に反発し、その結果、共産主義者との関わりを疑われ、暗殺されたと考えるのが順当である。

現ソクチャン省政府編纂の地誌によれば、ジエム政権期、コーチシナ・カンボジア人協会の所在地では、正門にクメール語で書かれた同協会の名称³⁸⁾がセメントで塗りつぶされ、「クメール局 (Ty Miên Vù)」という機関が設置された。それによって、当時のクメール人知識人を中心に、不平や反対の声が上がっていた。さらに、寺院学校を含む公立学校でのクメール語教育の禁止に関しては、各学校の教員やフランコ・クメール学校に通っていた生徒の間で、反対運動が起こっていた [Ban Tuyên Giáo Tỉnh Ủy Sóc Trăng 2005: 91]。

南ベトナム政府期にブオン寺で出家していたトンによると、クメール局は、クメール人の民族・宗教問題を取り扱う組織であり、そこで働く役人のほとんどがクメール人であった。クメール局は主に教育・農業分野への支援を行っていたが、公立学校でのクメール語教育は実施されず、農業への支援も少なかった。トンは、僧侶としてブオン寺に止住していた時、同寺の出家者の名簿をクメール局に提出する仕事を担っていたという (トン, 1955~, 男性, フータン社幹部 / ブオン寺管理委員会メンバー, 2012/3/4 他)。

こうした点より、クメール局は、従来、コーチシナ・カンボジア人協会や上座仏教組織が担っていた民族・宗教問題に関する業務を、国家が代行・統括するために、ジエム政権期に新たに設置された機関であったと考えられる。もっとも、クメール局は、従来のコーチシナ・カンボジア人協会と異なり、公立学校でのクメール語教育の普及を図る組織ではなかったため、住民たちから強い反発が生じていた。

前述のチエンの証言にあるように、コーチシナ・カンボジア人協会が管轄していたフランコ・クメール学校の中等科では、クメール語のみならず、カンボジアの歴史教育も実施されていた。このようなカンボジアと同様の教育課程の廃止は、かつてカンボジアで学んだ経験があり、正統なクメール文化がカンボジアにあると考えていた僧侶ら知識人、またカンボジアを外

38) 現ソクチャン省政府編纂の地誌によると、「コーチシナ・カンボジア人道徳・知識・身体改善協会」のクメール語の名称は、“*Samacum Săksar Vithyalay Khmer-Côăsănsin*”である [Ban Tuyên Giáo Tỉnh Ủy Sóc Trăng 2005: 91]。

国としては認識していなかった一般の住民たちには、受け入れがたい措置であったと考えられる。たとえば、フータン社において、1950年代前半に僧侶としてカンボジアへ瞑想修行に行っていた前述のコーは「ゴー・ディン・ジエム時代にクメール文字が失われた」と述懐する（コー、1930～、男性、プオン寺管理委員会メンバー、2011/6/4）。また、ジエム政権崩壊後の1960年代後半に2年間ほどプノンペンにパリ語を学びに行ったフータン社H村のラターは、「ゴー・ディン・ジエム時代、クメール語教育が禁止され、カンボジアへ渡ることが難しくなった」と述べる（ラター、1948～、男性、農民、2011/6/3）。

一方で、ジエム政権にとって、仏領期以来のクメール人政治・仏教組織と、その影響下にあった公立学校の教育課程の存在は、ソクチャン省をいわばカンボジアの飛び地にならしめていた原因であった。従来のクメール人政治・仏教組織の再編は、ソクチャン省に暮らす住民たちの政治や宗教の中心に対する空間認識を、プノンペンからサイゴンの方へ仕向けるために不可欠な策であった。

5.2 僧侶の不满と解放民族戦線の拡大

かくして、住民たちとジエム政権の間で社会のあり方をめぐる認識の齟齬が生じ、ソクチャン省では、上座仏教・クメール語教育を重視する僧侶を中心に、ジエム政権への不满が広がっていた。僧侶のなかには、南ベトナム政府の転覆とベトナム南北統一を目指す「南ベトナム解放民族戦線（以下、解放戦線）」の協力者や参加者が現れ始めた。

フータン社周辺では、同社北東部に位置し、バサック河沿いのケーサット³⁹⁾県が、解放戦線の勢力が強かったといわれる。フータン社に隣接するフータム社はケーサット県に接し、同社の北西部には解放戦線の基地が作られていた。一方、フータム社の中心地ユントム市場のすぐ側には、南ベトナム政府軍の駐屯地があり、フータン社から8km弱離れたソクチャン市近郊には、南ベトナム政府軍・米軍の基地があった（フータン社の住民、2011/11/27他）。つまり、地政学的観点からすれば、当時のフータン社は、抗争しあう解放戦線と南ベトナム政府側両勢力の狭間に置かれていた。

解放戦線は、1960年、南ベトナム国内において旧ベトミン参加者を中心に結成された。解放戦線の設立には、北ベトナムの労働党が深く関わっていたものの、当初メンバーは一部を除いて多くが非労働党員であり、南ベトナム国内の住民から構成されていた。⁴⁰⁾ 設立時には、各職種団体や宗教・少数民族組織なども多数参加しており、ジエム政権への武力闘争で一致するさまざまな利益集団の連合体であった。⁴¹⁾

39) ベトナム語の南部方言では末子韻“ch”が“t”に変化するため、北部弁では「ケーサイック（*Ké Sách*）」となる発音が「ケーサット」になる。この地名は、クメール語で「砂」を意味する「クサイック（*Khsach*）」に由来する。

40) このような解放戦線の捉え方は、フランスへ亡命した旧解放戦線高級幹部で、非共産主義者を自認するチュオン・ニュー・タンの証言を参照した [Truong Nhu Tang et al. 1985: 68-69]。

現ソクチャン省政府の地誌によると、解放戦線は、上座仏教寺院の僧侶を介し、クメール人が多い地域社会に潜入し、動員工作或情報収集を行なうため、クメール人幹部を養成するとともに、ベト人幹部にクメール語を学習させていた。解放戦線は、同戦線側の住職が止住する寺院を「革命の基礎 (*cơ sở cách mạng*)」と位置づけ、そこに解放戦線の幹部を匿わせたり、僧侶の代表大会を開催して思想教育を行なったりしていた。積徳義礼や寺院で開催されていたさまざまな会合にも紛れ込み、住民の動員工作を行なっていた [Ban Tuyên Giáo Tỉnh Ủy Sóc Trăng 2005: 87-90]。

事実、フータン社においても、クメール語を理解するベト人の解放戦線兵士がいたという証言 (ペン (故人), 1924~2015, 男性, 農民, 2011/10/4), ブオン寺やパー寺で解放戦線参加者が僧侶に扮して紛れ込んでいたとの証言があった (ケーン, 1949~, 男性, パー寺管理委員会メンバー, 2012/3/9)。

現在、フータン社の住民は、解放戦線について言及する際、「革命 (*Cách Mạng/Padivoat*)」, ないしは「ベトコン (*Việt Cộng*, ベトナム人共産主義者)」という言葉を用いる。「ベトコン」という言葉は、元々は南ベトナム政府と米軍が用いた蔑称であったが、現在は住民たちの間で慣用的に使用されている。日常会話のなかでは、インドシナ戦争期の「ベトミン」とベトナム戦争期の「革命」, 「ベトコン」が同様の意味で使われていた。解放戦線に参加するという行為は、「革命に入る (*choul Cách Mạng/Padivoat*)」という表現が用いられていた (フータン社の住民, 2011/11/27 他)。

以下、フータン社において解放戦線に参加したと述べる住民のうち、本論に関連すると思われる 2 人の事例を考察したい。まず、在フータン社ブオン寺の寺管理委員会メンバーである、前述のコーの事例がある。前述したように、コーは 1949 年にブオン寺で出家し、1952 年から 1955 年まで、瞑想修行のためにカンボジアへ渡っていた。彼はインドシナ戦争中、1949 年頃までベトミンに参加していた経験がある。彼は、ベトミンに加わった経緯を、次のように話す。

(日本軍の仏印進駐期一引用者注) 当時の自分は手伝いで銃とか弾薬を作っていたが、日本軍が負けるとフランスが戻ってきた。その時の自分は暇だった。その年はもう兵士になれる 15-6 歳になっていた。カーマウに遠征し、敵、つまり西洋人を殺した。というのも、自分は兵役に就いていたから (コー, 1930~, 男性, ブオン寺管理委員会メンバー, 2011/6/4)。

41) たとえば、解放戦線設立 50 周年の記念本によると、同戦線には、北ベトナムの労働党と結びついていた人民革命党 (*Đảng Nhân Dân Cách Mạng*) のほか、ベトナム民主党 (*Đảng Dân Chủ Việt Nam*)、農民、労働者、女性、学生、教員、軍医、文芸家などの各組織に加え、中部高原の少数民族自治運動組織、仏教・キリスト教系の組織が参加していた [Hà Minh Hồng, Trần Nam Tiến 2010: 51-52]。

コーは当時の兵役について、フランス軍に「従える人は従って、そうできない人はベトコンに従った」と述べる。彼はベトミン除隊後の1949年頃にブオン寺で出家、カンボジアでの修行を経て、1957年頃に還俗、同年にフータン社A村の女性と結婚した。30コン（約3.9ha）の農地を所有する自作農として暮らしていたが、まもなく南ベトナム軍に徴兵され、6年間従軍している。その後、1965年に彼は「僧侶」⁴²⁾に誘われ、解放戦線に参加した（コー、1930～、男性、ブオン寺管理委員会メンバー、2011/6/4）。

彼が解放戦線に参加した1965年頃は、米軍がベトナムへの介入を深めて戦争が激化し、解放戦線が、積極的に勧誘を行なって兵力を増強していた時期である。そしてジエム政権崩壊直後でクーデターが相次ぎ、国内が混沌としていた時期であった。そして、彼に解放戦線への参加を促していたのが、住民の信仰の対象であった僧侶であった点は重要である。僧侶は、解放戦線が上座仏教徒を動員するうえで有用な存在になっていた。

続いて、現在ブオン寺管理委員会を務めている前述のフオンの事例がある。前述したように、彼は1955年から1966年までブオン寺で出家し、その間1959年から1962年までの3年間、プノンペンに留学していた。彼は、出家中の1962年から1968年頃まで解放戦線に参加していた。彼は5人兄弟の長男であったが、すぐ下の弟を除く兄弟全員が解放戦線に参加したという（フオン、1940～、男性、ブオン寺管理委員会メンバー、2011/9/4）。彼は、南ベトナム政府期と比べて現在を次のように評価する。

ベトナムは進歩した。今は自由だし、階級も差別もない。アメリカ時代（南ベトナム政府期—引用者注）は生活が苦しかった。今は国が建設や保険など、さまざまなことを支援してくれて生活は楽になった。宗教・信仰も自由だ（フオン、1940～、男性、ブオン寺管理委員会メンバー、2011/9/4）。

フオンは、実家が40コン（約5.2ha）の農地を所有し、プノンペンで高等教育を受けられるほど富裕であり、経済的な問題は彼が解放戦線に加わった主要な理由ではないだろう。むしろ、彼が解放戦線に参加した1962年という時代状況や、当時僧侶であったという立場を考えると、1959年以降のジエム政権によるクメール語教育の廃止や、上座仏教への統制が動機の背後にあったと推察される。旧政府と対比して現政府を肯定しようとする語りにおいて、彼が宗教・信仰の自由を強調しているように、彼にとってそれが重大な問題になっていたことがうかがえる。フオンは、ジエム政権による統制が厳しくなった1959年にプノンペンへ渡ってお

42) コーへの聞き取りの際、筆者はベトナム語で会話し、その内容をボイスレコーダーに録音した。「僧侶」という単語は“*luc sư*”というベトナム語から翻訳した。“*luc sư*”は聞き慣れない言葉であったが、“*ông luc*”や“*sư*”という言葉はベトナム語において上座仏教寺院の僧侶を指して使われる言葉であったため、「僧侶」と訳した。

り、メコンデルタとカンボジアを結んでいた従来の上座仏教・クメール語教育課程を利用した最後の世代であった。こうした経験をもつ彼は、僧侶として解放戦線に参加している。

以上、フータン社における元解放戦線参加者 2 人の個人史について検討した。かれらは、解放戦線に参加する積極的な動機を述べたわけではなかったが、かつてメコンデルターカンボジア間を僧侶として移動した経験をもっており、この経験がかれらの解放戦線の参加に深く関わっていたと考えられる。コーの証言にもあるように、当時はクメール語教育や上座仏教を重視していた僧侶が住民たちに解放戦線の参加を促しており、コーやフオンのように僧侶としてカンボジアへ渡った経験をもつ住民が、特に僧侶の呼びかけに呼応しやすかったといえよう。

6. お わ り に

本論は、20 世紀半ば、南ベトナム領となったメコンデルタにおいて生じたクメール人の言語・仏教・帰属の問題について考察した。具体的には、まず、仏領期から 1950 年代後半まで、メコンデルタからカンボジアにかけて、上座仏教やクメール語を基盤とする住民たちの空間認識や移動傾向、住民間の関わりがみられたことを説明した。次に、こうした空間認識や移動傾向、住民間の関わりが、南ベトナムという国家領域内での住民組織化を進めるジエム政権の国籍付与による住民分類、公立学校におけるクメール語教育の廃止、上座仏教組織の再編によって、変化を迫られるようになっていったと論じた。最後に、変化に対する住民の反応のひとつが、解放戦線への参加という形態で表出されていったことを指摘した。

1950 年代後半まで、メコンデルタのソクチャン省に暮らしていた住民たちは、上座仏教寺院におけるパーリ語・クメール語教育を介して、またプノンベンやアンコールワット（シエムリアップ州）という文化、宗教の中心地への巡礼や修行という行為を通じて、カンボジアと関わっていた。カンボジアへの移動は、カンボジア仏教改革の流れを汲んだ「正しい」上座仏教・クメール語教育の習得のみならず、その流れとは直接関係のない瞑想修行の実践といった動機もあった。そして、上座仏教やクメール語に基づいていた世界のなかで生き、それに利益や価値を見出していた住民は、「クメール人」という民族的なカテゴリーに限定されず、華人や混血住民も多く含まれていた。

このように 1950 年代後半のメコンデルタにはカンボジアとのつながりを維持する曖昧な立場の住民が数多くいたが、南ベトナムの政治的統合を目指したジエム政権は、住民たちの帰属を明確化させてかれらが隣国の影響を受けないように国籍別、民族別に分類するようになった。カンボジアと結びついていた公立学校のクメール語教育課程の廃止や、従来の上座仏教組織、上座仏教組織の再編を図る一方、南ベトナム国内でクメール系上座仏教組織の統一を目指す仏教組織の結成やパーリ語学校設立を承認したり、反共宣伝を目的としたクメール語のラジオ放送を開始した。

ジエム政権は、「クメール系ベト人」という微妙なカテゴリーを取って設け、クメール人に特化した政策を実施し、一部の上座仏教組織の結成を承認していたように、その統治は、素朴な同化主義ではなかった。実際、ジエム政権期を通じて、フータン社の各寺院ではクメール語・パーリ語教育が規制されずに継続しており、同政権のクメール人政策は、あくまで政治・仏教組織を対象としたものであり、実践レベルにまで深く介入するものではなかった。南ベトナム国内における上座仏教組織の統一という自身の政策理念に近い組織は承認する一方、カンボジアとの関係を重視する従来の組織の再編を迫るなど、ジエム政権はアメとムチを使い分けていた。

ではなぜジエム政権の統治は、反発を招いたのだろうか。その背景には、国家主義的な方針を最優先事項に据えたまま、国内の多様な住民たちと利害調整を図ろうとしたことがあった。つまり、ジエムは、政権の意向に近い一部の上座仏教組織を承認するなど、彼なりの懐柔策を模索してはいたが、対立するカンボジアのシハヌーク政権の宣伝工作や北ベトナムからの共産主義の浸透を警戒し、国内において国外とつながる要素を極力排除しようとしたため、カンボジアとの関わりに利益や価値を見出していたソクチャン省の上座仏教界や住民との間で対立を深めていった。この対立を背景に、反ジエムを掲げていた解放戦線などの政治組織に協力・参加する住民も現れ始めた。

ただし、フータン社において解放戦線に参加した2人の住民の事例を考察するかぎり、当時、反政府運動に参加していった住民たちが、明確な国家像を有し、特定の政治組織の掲げる政治理念に強く共鳴していたとは考えられない。むしろ、事例で取り上げた2人の住民が双方とも僧侶としてカンボジアに移動した過去を有していたことを考えると、かれらは、自身の経験に基づき、仏領期末期からジエム政権期にかけて従来の社会環境が変化していくことに敏感に反応し、上座仏教界の動向に呼応する形で、反政府運動に関与していったといえる。

ソクチャン省の上座仏教界では、ジエム政権下、カンボジアとの関わりの中かで生成されてきた従来のクメール語・上座仏教の環境が崩れていくことについて不満が高まっていた。こうした不満を背景に、フータン社のように末端の地域社会においても、僧侶が住民たちに反政府運動への参加を呼びかけるようになっていった。

これまでの研究は、20世紀後半において南ベトナム政府への反政府活動が広まっていった背景を理解するにあたり、反政府的な政治組織の理念と個々の住民たちの考えが、一枚岩であったかのように理解してきた。しかし、本論を通じて、誕生してまもない南ベトナムとカンボジアという2つの国家権力、住民の利害を代弁しようとするさまざまな政治・宗教組織、そして個々の住民たちの間で、複雑な対立、協力関係が成立していたことが明らかになった。

謝 辞

本論は、2008 年度松下幸之助国際スカラシップおよび日本学術振興会特別研究員奨励費（12J03147）の成果の一部です。ここに記して御礼を申し上げます。

引 用 文 献

日本語文献

- 小林 知, 2011, 「カンボジア仏教の歴史と現在」奈良康明・下田正弘・林行夫編『新アジア仏教史04 スリランカ・東南アジア 静と動の仏教』佼成出版会, 272-294.
- 笹川秀夫, 2009, 「植民地期のカンボジアにおける対仏教政策と仏教界の反応」『Kyoto Working Papers on Area Studies』85: 1-27.
- 白石昌也, 1993, 『東アジアの国家と社会5 ベトナムー革命と建設のはざま』東京大学出版会.
- 岡岡 完, 2001, 『ベトナム戦争ー誤算と誤解の戦場』中公新書.

ベトナム語文献

※ VNCH: Việt Nam Cộng Hòa（ベトナム共和国）の略

※ TP. HCM: Thành Phố Hồ Chí Minh（ホーチミン市）の略

- Ban Chỉ Đạo Tổng Điều Tra Dân Số và Nhà Ở Trung Ương [文中では BCĐTĐT と省略, 中央人口・住居総調査指導委員会]. 2010. *Tổng Điều Tra Dân Số và Nhà Ở Việt Nam Năm 2009: Kết Quả Toàn Bộ* [2009 年ベトナム人口・住居総調査全体結果]. Hà Nội [ハノイ]: Nhà Xuất Bản Thống Kê [統計出版局].
- Ban Tuyên Giáo Tỉnh Ủy Sóc Trăng [ソクチャン省行政宣伝委員会]. 2005. *Truyền Thống Đấu Tranh Cách Mạng của Đồng Bào Khmer Tỉnh Sóc Trăng (1930-1975)* [ソクチャン省におけるクメール人の革命闘争の伝統 (1930~1975 年)]. Sóc Trăng [ソクチャン]: Phòng Nghiên Cứu Lịch Sử Đảng [党歴史研究室].
- Hà Minh Hồng, Trần Nam Tiến [ハー・ミン・ホン, チャン・ナム・ティエン]. 2010. *Mặt Trận Dân Tộc Giải Phóng Miền Nam Việt Nam (1960-1977)* [南ベトナム解放民族戦線 (1960~1977 年)]. TP. HCM [ホーチミン市]: Nhà Xuất Bản Tổng Hợp Thành Phố Hồ Chí Minh [ホーチミン市総合出版].
- Lê Hương [レー・フオン]. 1969. *Người Việt Gốc Miền* [ミエン系ベトナム人]. Sài Gòn [サイゴン]: Thư Viện Viện Phát Triển Bền Vững Vùng Nam Bộ [南部持続発展院図書館所蔵].
- Nguyễn Phan Quang [グエン・ファン・クアン]. 2000. *Việt Nam Cận Đại: Những Sử Liệu Mới (Tập 3) Sóc Trăng (1867-1945)* [近代ベトナムー新史料 (3 巻) ソクチャン (1867-1945)]. TP. HCM [ホーチミン市]: Nhà Xuất Bản Văn Nghệ TP. HCM [ホーチミン市文芸出版], Hội Văn Học Nghệ Thuật Tỉnh Sóc Trăng [ソクチャン省芸術文学会].
- Phan Thị Yến Tuyết [ファン・ティ・イエーン・トゥエット]. 1991. “Truyền Thống Đấu Tranh Cách Mạng của Người Khome ở Đồng Bằng Sông Cửu Long [メコンデルタにおけるクメール人の革命闘争の伝統]. In Mạc Đường (chủ biên) [マック・ドウオン (編)] *Vấn Đề Dân Tộc ở Đồng Bằng Sông Cửu Long* [メコンデルタにおける民族問題]. TP. HCM [ホーチミン市]: Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội [社会科学出版], 243-282.
- Tạ Chí Đại Trường [タ・チー・ダイ・チュオン]. 2011. *Người Lĩnh Thuộc Địa Nam Kỳ* [コーチシナ植民地兵士]. Hà Nội: Nhà Xuất Bản Tri Thức [知識出版].
- VNCH [ベトナム共和国]. 1963. *Thành Tích Chín Năm Hoạt Động của Chính Phủ: Kỷ Niệm Đệ Cửu Chu Niên Chấp Chính của Tổng Thống Ngô Đình Diệm Ngày Quốc Khánh 26-10-1963* [政府の活動

- 9年間の業績—1963年10月26日国慶日 ゴー・ディン・ジエム大統領執政9周年記念], Sài Gòn [サイゴン]: VNCH [ベトナム共和国].
- VNCH, Bộ Kinh Tế Quốc Gia [ベトナム共和国 国家経済省], 1955. *Việt Nam Niên Giám Thống Kê: Quyển Thứ Tư 1952-1953* [ベトナム統計年鑑—第4版 1952-1953], Sài Gòn [サイゴン]: Viện Thống Kê và Khảo Cứu Kinh Tế Việt Nam [ベトナム経済統計・研究院].
- . 1960. *Việt Nam Niên Giám Thống Kê: 1958-1959* [ベトナム統計年鑑—1958-1959], Sài Gòn [サイゴン]: Viện Quốc Gia Thống Kê [統計国家院].
- VNCH, Bộ Thông Tin [ベトナム共和国 情報省], 1959. *Tỉnh Ba Xuyên* [バースエン省], Ba Xuyên [バースエン]: VNCH, Bộ Thông Tin [ベトナム共和国情報省].

クメール語文献

- Kru Utteisaachar Thach Hanh nung Kru Utteisaachar Trieu Buol [パーリ語教師タイック・ハーンおよびパーリ語教師トリエウ・ブオン], 2002. *Chivea Pravoat nei Preah Daec Kun Vichitppanho Lu Chu* [高僧ヴィチットパニョー・リユー・チュー小史], Voat Champa [チャンパー寺].

欧米語文献

- Biggs, David. 2010. *Quagmire: Nation-Building and Nature in the Mekong Delta*. Seattle: University of Washington Press.
- Cooke, Nola. 2004. Water World: Chinese and Vietnamese on the Riverine Water Frontier, from Ca Mau to Tonle Sap (c. 1850-1884). In Nola Cooke and Li Tana eds., *Water Frontier: Commerce and The Chinese in the Lower Mekong Region, 1750-1880*. Singapore: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., pp. 139-156.
- Chanda, Nayan. 1986. *Brother Enemy, the War after the War: A History of Indochina since the Fall of Saigon*. Orlando, Florida: Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- Chandler, David. 2008. *A History of Cambodia*, fourth edition. Philadelphia, PA: Westview Press.
- Fall, Bernard B. 1964. *The Two Viet-Nams: A Political and Military Analysis*, revised edition. New York: Frederick A. Praeger.
- Herring, George C. 2002. *America's Longest War: The United States and Vietnam, 1950-1975*, fourth edition. Boston: McGraw Hill.
- Hickey, Gerald C. 1982. *Free in the Forest: Ethnohistory of the Vietnamese Central Highlands 1954-1976*. New Haven and London: Yale University Press.
- Li Tana. 2004. The Water Frontier: An Introduction. In Nola Cooke and Li Tana eds., *Water Frontier: Commerce and The Chinese in the Lower Mekong Region, 1750-1880*. Singapore: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., pp. 1-17.
- McHale, Shawn. 2013. Ethnicity, Violence, and Khmer-Vietnamese Relations: The Significance of the Lower Mekong Delta, 1957-1954, *The Journal of Asian Studies* 72(2): 367-390.
- Miller, Edward. 2013. *Misalliance: Ngo Dinh Diem, the United States, and the Fate of South Vietnam*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Schrock, Joann L., William Stockton, Jr., Elaine M. Murphy and Marilou Fromme. 1966. *Minority Groups in the Republic of Vietnam*. Washington, D.C.: Cultural Information Analysis Center, The American University.
- Taylor, Philip. 2013. Losing the Waterways: The Displacement of Khmer Communities from the Freshwater Rivers of the Mekong Delta, 1945-2010, *Modern Asian Studies* 47(2): 500-541.

_____. 2014. *The Khmer Lands of Vietnam: Environment, Cosmology and Sovereignty*. Singapore: NUS Press and Nias Press.

Truong Nhu Tang, David Chanoff and Doan Van Toai. 1985. *Việt Cong Memoir: An Inside Account of the Vietnam War and its Aftermath*. New York: Vintage Books.

未刊行公文書

Association pour L'Amélioration Morale, Intellectuelle et Physique des Cambodgiens de Cochinchine [文中では AAMIPCC と省略, コーチシナ・カンボジア人道德・知識・身体改善協会]. 1939. *Statuts: Approuvés par M. le Gouverneur de la Cochinchine le 4 Mai 1935* [1935 年 5 月にコーチシナ総督によって承認された規約] (Trung Tâm Lưu Trữ Quốc Gia II, TP. HCM [ホーチミン市国家第 2 公文書館所蔵])

_____. 1942 (August 16). *Le President de L'Association, A Monsieur le Gouverneur de la Cochinchine (cabinet) à Saigon* [協会の会長, サイゴンにおけるコーチシナ (政府) 総督] (Trung Tâm Lưu Trữ Quốc Gia II, TP. HCM [ホーチミン市国家第 2 公文書館所蔵])

Giáo Hội Phật Giáo THERAVADA [テーラワーダ仏教教会]. 1969 (May 28). *Để Đồng Bào Việt Gốc Miền Chúng Tôi được Giữ Nguyên Vẹn Vị Trí Thiểu Số Đúng theo Thực Tế và cả Pháp Lý của Hiến Pháp Đế Nhị Việt Nam Cộng Hòa vừa đã Quy Định* [現状どおり, またベトナム第二共和国が規定した憲法法理に基づいて, 我々クメール系ベトナム人に少数派としての正当な立場を維持させていただきたい] (Trung Tâm Lưu Trữ Quốc Gia II, TP. HCM [ホーチミン市国家第 2 公文書館所蔵])

Gouvernement provisoire du Sud Việt Nam [南ベトナム暫定政府]. 1949 (March). *Note d'Etude sur la Population Khmère Résidant sur le Territoire du Sud Viêt Nam* [南ベトナム領内に居住するクメール人人口に関する研究ノート] (Trung Tâm Lưu Trữ Quốc Gia II, TP. HCM [ホーチミン市国家第 2 公文書館所蔵])

VNCH, Hội Đồng Dân Quân [ベトナム共和国, 民兵会議]. 1967 (May 15). *Tài Liệu Thuyết Trình Trước Hội Đồng Dân Quân của ông Sơn Thái Nguyên về Việc “Phát Triển và Nâng đỡ Đời Sống” Đồng Bào Việt Gốc Miền tại Nam Phần Việt Nam* [ベトナム南部クメール系ベトナム人の生活発展・支援に関するソン・ターイ・グエン氏の民兵会議上における報告資料] (Trung Tâm Lưu Trữ Quốc Gia II, TP. HCM [ホーチミン市国家第 2 公文書館所蔵])

新聞, 雑誌, 官報

The Times of Viet Nam. Saigon. 1958 (June 28). What is Phnom Penh Driving At?

The Times of Viet Nam Magazine. 1962 (October 28). This National Day Brings An Unwavering Faith And A Promise of Victory.

VNCH, Công Báo [ベトナム共和国, 官報]. 1957 (May 4). Trích Sắc Lệnh Số 98-TP Ngày 22 Tháng Tư Năm 1957 [1957 年 4 月 22 日, 97-TP 号法令を引用].

_____. 1958 (September 27). Trích Sắc Lệnh Số 473-TP Ngày 17 Tháng Chín Năm 1958 [1958 年 9 月 17 日, 473-TP 号法令を引用].

ウェブサイト

D-Maps.Com. <www.d-maps.com/carte.php?num_car=712&clang=en> (2015 年 9 月 11 日アクセス)

The Phnom Penh Post. 1998 (June 5). The obstruction of grandeur: the Expo of 1955. <<http://www.phnompenhpost.com/national/obstruction-grandeur-expo-1955>> (2014 年 11 月 17 日アクセス)